

エステル的人生から学ぶ(1):「神が用意している驚くべき計画」

メッセージノート (2022.7.3)

◆ エステル記

1. 異国の地に住むユダヤ人たちを襲った最悪の事態から、神は彼らをどのように救い出されたのか。
2. どのような危機的状況にあっても、神は必ず「神の民」(クリスチャン)を守られる。「神の民は不滅である」。

◆ エステル記の背景

1. イスラエルは、「受難の民」。前722年、北イスラエルは、アッシリヤによって滅ぼされ、前586年、南ユダは、新バビロニアによって滅ぼされた。その時、多くの者はバビロンを始め、各地に強制連行させられたが、前539年にペルシャのクロス王が、バビロニアを滅ぼしたため、ユダヤ人解放令が出され、故郷に帰ることが許された。
2. しかし、実際、多くのユダヤ人たちは、異国の地に残った。それは、すでに彼らの生活拠点が出来上がっていたからで、中にはエズラ、ネヘミヤ、モルデカイのように、ペルシャの高官となっていた者もいた。しかし、ユダヤ人たちは、少数派であり、弱い立場に置かれていた。これが前500-450年頃の状況。

エステル記 1章

1. 半年にわたる宴会

- ・ この宴会は、ギリシャ遠征の前年で、その戦いに向かって士気を高める目的があったと考えられる。
- ・ ペルシャ人は、重大事柄を相談するのに、酒を酌み交わしながらする習慣があった(ヘロドトス『歴史』I)が、この宴会は、「帝国の富と栄光を誇示する」(4)目的があった。cf. 本当に力のある者は、それを誇示する必要はない。

◇ 聖書には、「神は高ぶる者を低くし、謙虚な者には恵みを与える」という原理があるが、高ぶる者の心理は、不安や劣等感の裏返しであることが多い。

2. 男尊女卑の社会

- ・ 11節:「王妃ワシュティに王冠をかぶらせて連れて来るようにと命じました。絶世の美女である彼女の美しさを、人々に見せたかったのです。その心理の背後には? タルグム(アラム語の解釈文)によれば、王は、ワシュティに全裸で、王冠だけを冠って出てくるように命じたとなっている。ヨセフォスによれば、大妃は、夫人をよそ者に見せてはならないというペルシャの掟に従ったのだという。←この王の命は、酔った勢いとはいえ、横暴、権力の乱用、性的逸脱であった。
- ・ (この王妃の拒否に対する)男性社会の対応: 男の権威づけは、外から法律で強制するというやり方(16-20節)。聖書は、様々な所で、生き方によって、導くのがリーダーであると教える。本当のリーダーであるなら、外敵拘束力によってではなく、内側から溢れ出る人格によって導くのである(スカッゼロ『情緒的健康なリーダーシップ』)。

- ・ 同じ時期に「神の民」に書かれた聖書の教え:

マラキ 2:14-16 ¹⁴「なぜ神は私たちを見捨ててしまったのか」と、あなたがたは泣き叫んでいます。そのわけは、主があなたの裏切り行為を見たからです。あなたは、長い間あなたに信実を尽くした妻を裏切り、大切に養うことを約束した伴侶を離縁したのです。¹⁵あなたは主によって妻と一体にされました。結婚した二人は、神から見れば一人なのです。それが神の深いご計画です。神は何を望んでいるのでしょうか。それは、あなたがたから生まれる、主に従順な子どもたちです。ですから情欲に気をつけなさい。若い時の妻に誠実でありなさい。¹⁶イスラエルの神、主は離婚を憎み、心ない男をきらうと言っているからです。それゆえ、情欲を抑えなさい。妻を離縁してはなりません。(LB)

◇ 現代訳「わたしは、服で覆うように、暴虐で身を覆う者を憎む」。to cover one's garment with violence(NLT)。「血のついた(夫の)上着を隠す」、「暴力を上着で隠蔽する」とも訳せる。いずれにせよ、DVのことを述べていることは、明白。「DV」

という概念も存在していなかった時代（前450年）に、神は弱い女性の立場を擁護している。

マラキ3：24 彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもってこの地を撃つことがないように。

◇ この言葉は、旧約聖書の最後の言葉。夫であり、父親ある男性のあり方（問題行動）がどれほど社会を破壊しているかを指摘している。この家庭の回復、人間関係の回復が、社会の回復に不可欠なのだと言書は教える。

エペソ5:25,28²⁵ 夫は、教会のためにいのちを捨てるほどの愛を示されたキリストにならって、妻を愛しなさい。・・・²⁸ これこそ、夫が妻に対してとるべき態度です。つまり、夫は妻を、自分の体の一部のように愛さなければなりません。二人は一体なので、夫が妻を愛する時、自分自身を愛しているのです。

➤ ここで教えられることは、聖書の神は、この社会をどのように見ておられるかということ。男性優位社会の歪みの自覚と、そこからの回復がいかに重要であるか。力による支配ではなく、愛と思いやりによって家庭も、社会も成り立つということ。また、同時に、神は、立場の弱い女性たちを守ることを太古の昔より実践してこられたということだ。

エステル記 2章

3. 神の選びの器

・ 後悔するアハシュエロス王(クセルクセスI): エステルが、王妃に召されるのは、ギリシャ遠征に敗北した翌年と思われる(2:16)。この頃、王は公私ともにボロボロで、あの半年間も続けた宴会で示した威勢の良さはない。これが人間の真実な姿ではないか。弱いから強がってみせる。その脆弱さを自覚し続けることを忘れてはならない。

・ エステルという女性: そんな時に、神が、選ばれたのが、ユダヤ人の女性孤児だったエステル。「エステル」は星の意味で、希望を表す。ヘブル名は、「ハダサ」、それは、「ミルトスの木」の意味(→イザヤ55:13, ネヘミヤ8:15)で、白い花びらを開き、たくさんの黄色い雄しべをつけた美しい花を咲かせ、その実は、鎮痛剤に用いられ、その枝は祝いの木として、特に、仮庵の祭りの、仮小屋に使われた。イザヤ書では、「いばらの代わりにみみの木が、おどろ(草木の乱れ茂った所)の代わりにミルトスが生える」とあり、バビロン捕囚からの解放を意味するとともに、終末的な意味での祝福を意味する木。呪いが祝福に変えられる希望を表す言葉。そのことを正に生き方を通して体現した女性がエステルだった。

・ 伏線: ①エステルが王妃に召されたのは、彼女個人の立身出世のためではなく、もっと大きな目的があった。②また、同時に、王に対する謀反に関する情報をモルデカイが、伝えたという一節(2:21-23)が、挿入されているが、これが後に、神の時に大逆転を生んでいく鍵となる。

◇ この二人に共通していることは、置かれたところで最善を尽くしたことだ。エステルは、「すべての人から好意を持たれた」(現代訳)とあるし、モルデカイも自分のできることを忠実にやってきた(エステルを養女として育て、また官僚としても王に仕えていた)。

➤ 私たちの人生においても同じように、神は全てのことに意図を持って進めておられる。それゆえ、今できること、それがどんなことであれ、精一杯行なっているなら、それは後で必ず意味を持つてくる。

➤ あなたがしたどんな小さな善であっても、神は覚えておられる。だから、落胆しないで、主から、示されていること、与えられている責任を落胆せずに果たしていくことだ。いつか必ず驚くべき祝福へと変えられていく。

まとめ

1. 神は、この世では取るに足らないと思われる人を用いて大いなる業をなさると信じているか?
2. 神があなたのことを覚えておられることをどこまで本気で受け止めているだろうか?
3. 今あなたがしていることが、いつか大きく用いられる日が来ることを信じることができるか?